

平成27年6月22日 平成27年度第2回岐阜県総合教育会議 議事録

1 開催日時及び場所

平成27年6月22日(月) 16時00分 ~ 17時30分

岐阜県庁舎 4階特別会議室

2 出席者

知事 古田 肇

教育長 松川 禮子

委員 稲本 正

委員 土屋 嶮

委員 月村 時子

委員 野原 正美

委員 森口 祐子

3 学識経験者

昭和女子大学学長 坂東 眞理子

4 オブザーバー

副知事 上手 繁雄

清流の国推進部長 宗宮 康浩

副教育長 尾形 哲也

5 陪席

清流の国づくり政策課長 尾鼻 智

教育総務課長 西垣 功朗

6 議事録

別紙のとおり

議 事 録

発 言 者	発 言 内 容 () 書きは事務局発言
冒頭あいさつ	
知 事	<p>前は教育大綱の策定を念頭に置きながら皆様のご意見をお伺いしたが、2回目の今回は議論を深めるために、昭和女子大学学長の坂東眞理子先生にお越しいただきご講話をいただくこととした。</p> <p>本日は、昨今の教育をめぐる環境や課題、あるいは総合教育会議に期待することなどを存分にご議論いただければと思う。</p>
坂 東 氏	<p>私は、公務員として勤務した後、12年前に大学の現場に入った。少子化により学生が減っていく中、大学としてどう生き延びるか日々格闘しているのが実情であり、教育問題全般の専門家ではないが、今回は良い機会を得られ感謝している。</p> <p>公務員の頃は、いわば舞台装置づくりを行っていたが、やはり大事なのもその上で演じるプレーヤーであり、教育というのは、まさにそのプレーヤーを育てる仕事だと思っている。</p> <p>地域の未来も国の未来も、どういう「人」を育てるかにかかっていると言っても過言ではなく、皆様が総合教育会議としてそれぞれの立場からご議論されるのは本当に有意義である。</p> <p>本日は、自分の実践から実感していることをお話しさせていただき、皆様からご意見をいただければと考えている。</p>
宗宮部長	<p>それではお手元の次第に沿って進めさせていただく。</p> <p>本日は、坂東先生よりご講話いただいたのちに意見交換を行う。</p> <p>なお、参考としてお配りした資料「教育大綱策定に向けた論点整理」について説明申し上げます。</p> <p>これは、第2次岐阜県教育ビジョンをベースに、知事部局と教育委員会との連携強化といった法改正の趣旨を踏まえ、柱立ての追加等を行ったものである。例えば、「Ⅱ（3）大学との連携促進」、「Ⅲ（2）木育など環境教育の推進」などを追加しており、加えて、第1回会議時の各委員の主な発言を括弧書きにて記載してある。</p> <p>こちらも参考にしながら意見交換を行っていただくようお願い申し上げます。</p>
坂東氏講話	
坂 東 氏	<p>教育をめぐる課題というのは、世の中の変化とともに次々と新しく生まれてくるため、その都度対応が必要ではあるが、それだけに追い立てられてはいけぬ。長いスパンで見ることにも必要である。今日は、目の前の課題にどう対処するかというよりも、もう少し長いスパンで教育をどう考えてい</p>

るかについて話をさせていただく。

教育とは、社会がどういう人を必要としているのか、それがストレートに反映してくるものだと思う。例えば、戦前はお国のために尽くしなさいという教育であったし、あるいは、欧米先進国に追いつき追い越せといった教育であった。戦後70年間、特に1960年代あたりから期待されてきた人間像というのは、経済的な豊かさに貢献できる人材である。昨今言われている、グローバル人材や科学技術人材も経済に役立つ人間と捉えることができるのではないか。

一方で、期待される人間像がすべてではなく、自分の好きなことをするのが幸せな人生だ、自分の持って生まれた能力を十分に発揮することができる、それが教育の目標なんだという考えもある。教育というのは、その子の持っている力を引き出すのが大事であって、教え込むことではないという考え方もある。

私自身が考える、最も重要な教育の課題は、家庭の教育機能、地域の教育機能、そして企業・職場の教育機能が様々な要因で衰えてきて、それらが皆、学校教育に過大に期待されているのではないかとということである。OECDの中でも、日本の教員が最も勤務時間が長いというデータもある。書類作成から、人間教育まで様々なことを、学校や教師が一手に引き受けることになってしまっている。

どういった人材を育てるべきかを考えると、私は、幸せな家庭を作って次の世代を生み育てることが出来る力を身に付けることが基本になるのではないかと思う。そのために必要な能力は、昔は家庭で身に付けていたが、今は学校に期待されている状況である。

体力づくりや生活習慣といったことが、本当に学校だけで身に付くことかと疑問に思うが、小家族化・核家族化ということもあり、教える人がいないため学校に過度な期待が集まるのだと思う。

また、仕事のための専門的な技術だけではなく、コミュニケーション能力だとか、約束を守るだとかそういったことも学校で身に付けることを期待されるようになってきた。

昔の日本の大学は、選別することを期待されており、教育は期待されていなかった。そこで何を勉強するかよりも、入学試験での選別の結果、潜在能力があるということが分かれば、仕事に必要な能力は、企業が採用してから鍛えるということであった。今は、企業に体力がなくなり、即戦力が求められるようになって、大学もそういう力を身に付けさせることに追われている。

いずれにしても、幸せな家庭人になるための準備、職業人として生き生きと働くための準備ということが、過分に学校に期待されるようになってきているが、もっと重要な、志というか、自分が生きていくことによって世の中を少しでも良くしようということについては、だれも言ってこなかったのではないかと思う。自分自身の幸せや満足とは別に、周りの人を助ける、困っている人を助ける。そのために献身するということを二の次、三の次とする現状は、非常に問題であると思う。

それを誰がやるのかについては、今、学校に過重に負担がかかっているため、社会が応援しなくてはならないのではないかと思う。是非、地域が次の世代の子どもたちを育てることに関わっていくべきである。例えば、学校教育クランクといった書類作成専門員を設置すれば、教師の負担を減らせる

	<p>のではないか。</p> <p>日本の体育・スポーツにおいては「学校対抗」が主であるが、むしろ地域でクラブを作って対抗するようなことも取り組むと良いのではないか。何もかも学校に属してしまうというスタイルではなく、属する場が複数あるほうが子どもたちは幸せである。一つしか自分の所属する世界がないというのが、将来の会社人間に直結しているのではないか。教育委員会だけでは難しいかもしれないが、県がモデル地域を指定して取り組むと面白いのではないか。</p> <p>また、少子化が進む中、子どもはどこの家庭でも大事にされ、甘やかされることになる。昔は、弟妹のお守りや、労働力として家業の手伝いなどをしていたが、今はもっぱら思い出づくりとして、親が子どもを楽しませるということに終始している。地域も同様であり、例えば農業体験にしても、田植えや収穫といった楽しいことばかりであり、本当につらいことはやらせない。</p> <p>子どもたちには、家族の食事の支度や、地域の清掃、中学生による小学生への交通安全指導など、子ども自身が当事者として責任を持つことを教える必要があると思う。楽しいことの上澄みの経験ばかりでは、思う通りにならないことに直面した時に、乗り越えていく力が身に付かない。</p> <p>また、女の子をどう育てるか、男の子をどう育てるかということも今の話と共通するところがあると思う。昔は、男の子は跡取りとしての責任感を重要視して育てられていたが、今はそうでもない。制約なしに自由に育てたら、幸せな家庭人になれるのか、生き生きとした職業人になれるのかというと、そういうわけではなく、男の子には是非、幸せな家庭人になるための素養を幼い時から身に付けてほしいと思う。</p> <p>具体的には、料理・掃除などの家事能力、育児あるいは介護などである。今は、介護離職者の大半は男性だと言われている。また育児に関して、夫が第1子の育児を手伝うと、妻は第2子を考えるが、そうでないと次を考えられない。専業主婦に子ども一人が多いのはそのあたりが影響しているのではないかという話もある。</p> <p>岐阜県において、男女とも小学校に入る前にご飯が炊けるようにする、週に一回でも子どもが自分と親のお弁当を作る、中学校卒業までには郷土料理を取り入れた夕食を作るといったことを、モデル的に取り組むと良い。</p> <p>幸せな家庭人になるためには、男の子は、結婚するためのコミュニケーション能力を子どものころから身に付ける必要がある。また、決断力や責任感と同様に、思いやりや忍耐力、思慮深さを身に付けていく必要がある。</p> <p>女の子については、自分の人生のプレーヤーになる必要性がある。夫を通じて、あるいは子どもを通じてではなく、自分自身が人生の責任者になることを子どもから教えたい。そのため、例えば資格や語学を身に付けることも大事だが、一番は責任感、判断力ということを伝えたい。</p> <p>一般的な教育の課題について言わせていただいたが、皆さんからのご意見も伺いたい。</p>
意見交換	
稲本委員	自分が高校生の際は学校にテストの順位を貼り出しており、上がっていくのが嬉しかった。

	<p>今の教育は子どもに甘くなり、子どもたちをちやほやしているように感じる。成績を貼り出すようなやり方は問題かもしれないが、今後、少子化が進み、オリンピックが終わると70代が人口の4分の1以上になる状況の中で、学校教育はもう少し厳しさがあってもいいのではないか。シビアに考えないと日本の教育は成り立たないのではないか。</p>
坂東氏	<p>教育現場にいる立場だと、理想は「獅子を谷に落とす」であるが、それを行うと今は親からクレームが入る。石につまずいて血が出て、涙を拭いて走らせることで子どもはたくましくなると思うが、今は石を残しておいた学校の責任が問われてしまう。</p>
稲本委員	<p>神岡の高校では1学年の生徒数がとても少ない。このような過疎の地域に、特に頑張る子どもを集めるような取組みがあっても良い。また、飛騨地域の子どものみで岐阜市の高校に通いたい子もいるが、今は学区の縛りがあるからできない。教育の仕組みを変え、頑張れる子はどんどん頑張ってもらえる仕組みができるとよい。</p>
坂東氏	<p>昭和女子大にはボストンにキャンパスがあり、学科によっては半年間の留学生活が必須となっている。この経験は、英語の習得そのもの以上に、親と離れて共同生活をするることによる人間的成長にとっても効果がある。ある時期になれば、親から引き離す経験をさせるのはいいことだと思う。</p>
知事	<p>昭和女子大は自宅からの通学者が多いのか。</p>
坂東氏	<p>昔は寮も完備して地方出身者が多かったが、次第に減少しており、現在は4分の3が自宅通学である。</p>
知事	<p>他の大学もそういう傾向にあるのか。</p>
坂東氏	<p>早稲田もそういう傾向があると聞いており、地方出身者の活力を得ようと、奨学金制度などを設けているようである。</p>
稲本委員	<p>様々な地域から来た学生が混ざった方が環境としては良いと思う。</p>
森口委員	<p>ゴルフでも、選手の年齢が若くなってきており、10代の子が即戦力として入ってきた時の問題が起こるようになった。これまでは、競技生活が人を鍛え、それがゴルフにも生かされていき、資質の向上が戦略性の高まりにつながっていた。今は選手の若返りがゴルフ界全体の活力になる一方で、若い選手には欠落している部分もたくさんあり、それにどう対応していくのかという問題がある。マスコミは新しいスターの発掘を願うが、協会としては若い選手をどう教育するのか、変えられない部分と時代に即した変化とのせめぎ合いがある。改めて、社会がどういう人間を欲するかを考えると、すごく難しい問題だと感じた。</p> <p>また、少子化対策についてだが、女性に子どもを産むよう求めるような話が多く、家庭の話になぜ国が立ち入るのかと思う。産みたい人も一方で産めない人もいる。一律に産みなさいと求めるのは失礼に感じる。産める状況にある人が2人、3人と産める環境を整えてあげた方がいい。</p> <p>また、専業主婦は、仕事を持つ母親に比べ時間があることから、自分の余</p>

	<p>暇の時間が大切になり、その分、子どもの面倒を見ない親もいると聞く。理解不足なのか、子どもに縛られる時間を良いものと感じないのか、感覚の欠如なのかはわからないが。</p> <p>坂東先生のお話は、性別による教育という視点が分かりやすかった。男性・女性双方の理解がなければ人を理解することも難しい。また、少子化に対応した教育は、答えが難しいと感じた。</p>
坂東氏	<p>2点ご意見をいただいたが、まずスポーツキャリアに関しては、若くしてプロとして名を馳せた人が将来どうキャリアを全うするか、キャリアパスが確立していないのではないかと思う。成績を上げることと、社会人としての能力を身に付けることは別のカテゴリーである。社会人としての基本を身に付けるためのトレーニングも必要だと思う。社会人としてどのように自分の強みを生かすか、日本のスポーツ界の風通しをよくしていかれることを期待したい。</p> <p>少子化に対する意見に関しては、少子化問題自体に色々な要因がある。統計上でも、専業主婦よりも共働きの女性の方が出生率が高い。専業主婦は子育てにおいて孤立しがちであり、それに対して周りからのねぎらいの一言が重要。専業主婦は遊んでいるという批判も聞くが、孤立して、子育てに苦しんでいる女性もいるのではないか。子育てが孤立しないような社会づくりをお願いしたい。</p> <p>また、少子化の原因は男性・女性の両方にあるが、個人的には特に男性の責任が大きいと思っている。男性の生涯未婚率は20%であり、女性の2倍である。これはコミュニケーション能力の欠如が大きな要因だと思っている。</p> <p>また、非正規労働者が多くなり、妻子を養う収入がないことも原因と言われているが、だからこそパートナーと互いに支え合うためのコミュニケーション能力が必要なのではないかと思っている。</p>
野原委員	<p>少子化対策には特効薬がない。子育てにお金がかかるからといってお金をばらまいても子どもは増えないし、出会いがないからといって婚活パーティーをやっても同様である。</p> <p>また、現代社会では核家族が増えているが、自分も4人子どもがいる状況にあって、もし核家族だったら4人も育てられなかったと思う。近くに両親がいて面倒を見てもらったり、またご近所さんや、スポーツ少年団のコーチ、先生など、多くの方々に面倒を見てもらった。先ほど坂東先生から、様々な場所に所属することが必要だという意見があったが、自分も同感である。子どもを様々な場所に連れ出すことで、多くの方に子どもを育ててもらい、1人っ子に比べ単純に4倍も手はかからなかったと感じている。</p> <p>子どもとその親を地域で支える仕組みがもっとできたらと思う。</p>
坂東氏	<p>少子化の問題は、原因が一つだけなら対策も効果も出やすいのだが、複雑に絡みあっているものであり、こつこつやっていくしかない。</p>
土屋委員	<p>最近では地域で子どもを見かける機会が減った。結局、教員も子どもたちも忙しくなり過ぎたのではないか。</p> <p>職場でも、仕事以外にスキルアップのための時間が必要であったり、子ど</p>

	<p>もたちも、例えばスポーツ少年団をやっているなど家にいる時間も少ない、学校の先生も忙しい、こういったことが少子化につながっていくのではないか。</p>
坂東氏	<p>ワークライフバランスと言うが、まずはメリハリが大切。仕事に全力投球しなければならない時期というのは人生の中でそう長くはないと思うが、その時は一生懸命やり、そうでない時には家庭に重点をおくなど、切り替えがしやすい社会であってほしい。</p> <p>また、現在の社会では、子育てをするために女性が払う代償が大きいと感じる。1度辞めてしまうと正社員には戻れない。子育てによって5～10年間の空白期間があったとしても、そういった人を受け入れる社会づくりをしていかなければいけないと思う。大学も同様であり、18歳人口が減っている状況の中、大学も生き残りのためそういった人も受け入れ、送り出していかなければならない。</p> <p>一方で、親は子どものために授業料を払うが、自分が再就職するために授業料を払えるかという点で難しい。例えば公立大学で一定年齢以上の子育てをした女性に入学を認めたり、奨学金を制度化したり、フレキシビリティをもって取り組んではどうかと思う。</p> <p>今は派遣労働や日雇い労働が好ましい働き方ではないと批判されているが、若い人にとっては教育訓練を受ける機会がないのは問題だが、65歳以上の高齢者で働きたい人もたくさんいる。そのような人達に持続的に働いてもらうには、ボランティアよりもある程度の報酬を払った方が良い。1度仕事を辞めた人に戻ってきてもらうためのモデルケースとしてのチャレンジをされたら良いと思う。</p> <p>全国一律の施策では実情に合わないことも多い。まずは小さな単位でやることをやってみて、そこから少しずつ世の中が変わって行けばいい。</p> <p>ぜひ小さな成功例を作っていっていただきたい。</p>
稲本委員	<p>セカンドステージ大学の講師を2、3年経験したが、50代くらいの学生の方はものすごく勉強熱心であるため、講義を行うためにはこちらも相当な準備が必要となる。本当に一生懸命質問をしてくるため、こちらも勉強になる。</p> <p>教育については、社会人、例えば銀行でバリバリ働いている人と学校の先生と一緒に勉強するとか、そこに外国人も入れるとか、教育を今の枠でなく、先生も含めて交流しあうことで、突破口が見い出せるかもしれないと思う。</p> <p>他にも、文科系・理科系という概念を取り払った勉強の仕方も効果があるかもしれない。</p>
坂東氏	<p>昭和女子大学でもキャリアカレッジというものを去年から始めたが、やはり社会人は必死に勉強する。ポイントは授業料を親に払ってもらっているか、自分で払っているかの違いであると思う。身銭を切っている方は絶対元を取ってやるという思いでいる。また、自身の経験があるので、学校での知識しか持たない先生より生徒学生の方がレベルが高い。</p>
月村委員	<p>知識をしっかりと教えられる教師は多いが、人として魅力のある教師がだんだんと少なくなってきたように感じる。教師だけでなく私たち大人が、</p>

	<p>例えば母親とか、女性がどういう素敵な生き方をしているかとか、先人として、子どもたちに今生きている姿を見せることができれば、自分も家族を持ちたい、自分も親になりたい、教師になりたいなどといった夢や希望が膨らんでくるように思う。</p>
坂 東 氏	<p>今の中学・高校の教員は修士を取得していることが多い。また、教員免許を国家資格にしようという動きがあるように、プロフェッショナルの教員を採用しようというのが今の流れだと思う。このようなプロフェッショナルが、人間的な部分も学力の部分もオールマイティに教えることができれば良いことだが、それは無いものねだりかと思う。</p> <p>プロフェッショナルな専門教師には教える技術を磨いてもらい、人間的な部分は周りの方が関わっていけば良いと思う。やはり、学校、教師だけが教育をするというのは無理があるのではないか。孤立して子育てをする母親を周りが助けるように、教員だけでなく地域の老若男女、様々な方が学校に関わると良い。</p> <p>社会人に授業のアシスタントに入ってもらい、アシスタントソーシャルティーチャーといった制度を岐阜県で取り入れてみてはどうか。こういった方に社会のこと、人生のことについて教えてもらう、あるいは理科の授業に現場で働いている技術者に来てもらうという形でもよいと思う。</p> <p>教員は嫌がるが、教室を教員だけで運営するのではなく、様々な方が出入りできれば良いと思う。昭和女子大学でも、授業公開してくださいと言うと、皆嫌がる。しかし、一部でもできるところからやっていかなければ、絶対に変わらない。一度に変えようとしても無理があるので、できること、小さいことから始めた方が良い。</p>
教 育 長	<p>教育問題で一番課題になるのは、子どもたちが過ごす家庭や家族のあり方が昔とは変わってきているということだと思う。</p> <p>小学校や中学校の教員になる方というのは、真面目にコツコツやる人であり、ある程度信用できる人たちである。一方、昔から半面教師という言葉があるとおり、いい加減な教員はいくらでもいたし、そういうものだと言われ受けていた時代もあった。</p> <p>ところが、今は、教師1年目でも40代、50代と同じ様に働いてくれると保護者は期待するが、それは無理な話である。若い教員に、親でもできない、子どもたちの人間形成を期待できるはずはない。</p> <p>勉強ひとつとっても、学校以外に塾があるなど、今の世の中いくらでも代替機能があり、相対的に学校の果たす役割は小さくなっていると思う。にも関わらず、時代が学校に非常に大きなものを求めてくる。例えば給食についても、夏休み明けに子どもの口の中をみると、口の中がただれていたりして、非常に栄養状態が悪くなっていることがある。食育というものは本来学校が行うものではないが、学校が果たさざるを得なくなっている。学校教育にはそういった面が多く、非常に過大な期待を背負って苦労しているというのが現状である。</p> <p>今の流れというのは、学校がいじめも不登校も食育も、全てのものを引き受けるのは無理だから、役割分担して「チーム学校」として専門家を動員しようという動きになっている。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどを入れて教員を楽にしようとしているが、専門家と保護</p>

	<p>者の間に立って、教員が間を取り持ったりする必要があることから、未熟な教員にとっては非常に負担であり、必ずしも仕事が軽くなっていない。</p> <p>「チーム学校」というと聞こえは良いが、実態は国が教員数を減らす口実だと思っている。教員定数を増やさず、専門家を連れてくることによって、少子化に伴い教員数を減らしていきたいという一つの案であると思う。</p> <p>子どもを育てるのに社会の様々な人が関わるということは大変理想的なことであり、安定的に、信頼のおける人たちが、長期に渡って子どもたちと関わっていくというシステムをどう作っていくかが課題である。ただ学校というのは、親にとって子どもたちを居させるのに安心な場所であることは確かであり、それに代わるシステムを用意できるかどうかは大きな課題。現実的にはなかなか難しいと考えている。</p> <p>話は飛躍するが、岐阜県の県立高校の大きな特徴の一つは、商業、農業、工業といった専門高校にあると思う。これらの専門高校は、都会では普通高校に行けない子が行くという位置付けになっているが、岐阜県では非常に産業教育が盛んであることから、そういう位置付けにはなっていない。また、全国的には、岐阜高校よりも県立岐阜商業高校の方が有名であると思う。野球も強いし、商業高校としても全国ナンバー1だと言われている。</p> <p>そういった多様性があるということは、非常に良いことであり、いろいろな道を用意できることが素晴らしいと思う。</p>
知 事	<p>行政という立場で話をすると、教育の問題とどう関わっていくかということが難しいところである。もっと積極的に関わったほうが良いのか、あるいはあまり行政の価値観を押し付けてはいけないのか、そのあたりのバランスが悩ましいところである。</p> <p>今、どういう人材をつくるかという問題と、急速に進む少子化への対応という問題が重なっており、決定的な解決策を出しにくい。かといって焦るあまり、「社会に役立つ人を育てるのが大学だから文科系大学はいらない」と平気で言う人もいるが、そのような極端な考えはいかかなものかとも思う。</p> <p>岐阜県の場合、子育てのために様々な工夫をしているエクセレント企業を認定しているが、社員が生き生きと働いてもらえるだけでなく、地域貢献を含めて地域の子育てにまで企業が乗り出している。このところ毎年、全国規模で表彰される企業は、岐阜県のエクセレント企業であったと思う。そういう優れたモデルを見えるようにしていくことも行政の仕事かと思う。</p> <p>もう一つは、「隗より始めよ」ということで、県庁で働く者の子育て支援に、組織として取り組んでいきたい。</p> <p>学校と社会と地域の交流については、メカニズムから入っていくとかなり制度論に終始してしまいがちなので、それよりは好事例、グッドイグザンプルを見えるようにしていくということを考えていきたい。</p> <p>昭和女子大学の学長と理事長を兼ねられ、教育と経営の両方を見ておられる立場から、坂東先生が今、最も精力的に取り組んでいる課題はどういったものか。</p>
坂 東 氏	<p>昭和女子大学の教職員にいつも言っているのは、教育産業、とりわけ私立女子大学というのは下りのエスカレーターに乗っている産業であるということ。18歳人口が減っている、女子学生が共学を目指す流れの中で、受験</p>

	<p>者・入学者を確保していくには、よほどの努力が必要である。</p> <p>20世紀の女子大は良妻賢母を作ることが使命であり、そのために、寮の門限であったり、ドレスコードなどに厳しい教育をしてきたが、それでは駄目だということで私が招かれた。</p> <p>結果として偏差値も上がったが、それよりも、これからの女性像として、良い家庭を持つことは当然であるが、それだけではなく、社会で通用する力を身に付ける、自分の人生の責任者になれる人材育成を目指した。例えば、新入生のオリエンテーションを上級生が行うなど、教員が何から何まで面倒を見るのではなく、学生に責任を持たせるようにした。</p> <p>また、受験生の数を確保することは大変重要であり、そのために最も努力したことは就職率の向上である。この課題に戦略的に取り組んだ結果、おそらく今年を含めて5年連続で女子大の就職率ナンバー1となる。</p> <p>さらに、ボストンキャンパスの活用などを含め、昭和女子大学はチャレンジをしているというイメージを作ってきた。</p>
知 事	<p>地方の大学では、良い人材を育てることができるようになると、今度は、人材の流出という問題が起きてくる。</p>
稲本委員	<p>私の地元の高山市では、観光に携わる方は皆、英語でコミュニケーションを図ることができるが、昭和女子大学ではグローバル化に対応した取り組みは行っているか。</p>
坂 東 氏	<p>英語コミュニケーション学科、国際学科、グローバルビジネス学部があるが、うち2つは、私が学長になってから作ったものである。また、ボストンキャンパスの活用の他にも、海外の大学との交換留学を進めてきたところであり、就任当時は4校であった協定校が、もうすぐ23校になる。これらは、受験生たちのグローバル人材になりたいという希望が多いことに応えるものである。</p> <p>一方で、海外では英語を上手に話す人はいくらでもいることから、日本の文化・歴史についての知識や礼儀作法が身に付いていないまま英語だけ話せても何の意味もないということを教えてきた。</p>
稲本委員	<p>海外の人は、禅だとかお茶など日本文化に強い興味を示す。日本の文化を英語で伝えることができる人材を育てることが重要である。</p>
宗宮部長	<p>それでは、これをもって本日の会議は終了する。次回は秋口の開催を予定している。</p>